様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：２０１０５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ２０７９７

研究課題名（和文）乳幼児を持つ母親の地域との関係性構築支援のための尺度開発

研究課題名（英文）Developing a Scale to Evaluate How Well Mothers with Infants Build Relationships with People in Their Communities

研究代表者
本田　光（HONDA, HIKARU）

札幌市立大学・看護学部・准教授

研究者番号：８０５８１９６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、乳幼児をもつ母親が地域と良好な関係性を構築することを支援することに資する尺度を開発することである。研究は大きく４つの段階を経た。まず研究代表者が行った先行研究の成果をもとに42の項目群を作成した。次に予備的調査を実施した。作成した項目の重要性について保健師について尋ね、179人から回答を得た。その後、第１次調査として３歳までの子どもをもつ母親1182人に対して質問紙調査を行い、４因子17項目からなる尺度を開発した。第２次調査は、尺度の基準関連妥当性の検証を目的として、無作為抽出による母親997人を対象に実施した。以上のプロセスを経て、信頼性と妥当性が保証された尺度を開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　子育て支援、またその目的の先にある虐待予防は我が国における喫緊の課題である。本尺度を用いた地域活動や集団としてのデータの積み重ねによって、現在の子育て支援体制を見直し、地域支援の新たな枠組みを提供しうる可能性がある。また、母親の地域とのつながりの概念は、いずれもポジティブな表現で構成されており、調査票に回答する母親にとっては、多くの人達に支えられながら子育てをしていることを実感できる内容になっている。子育てを通して、母親自身も地域を構成する一人として成長する過程に寄与する尺度として発展させたい。

研究成果の概要（英文）：The goal of this investigation was to develop the Scale to measure how well mothers with infants can foster relationships with people in their communities to avoid solitary childrearing.
　To prepare this Scale, we created a pool of 42 questionnaires. In the preliminary investigation, 179 public health nurses answered a self-report questionnaire regarding the scale’s suitability, from June to July 2016. Subsequently, from August to October 2016, 1182 mothers with children aged three years or younger were given a self-report questionnaire. From this survey, a draft of the Scale including 17 items and four factors was created. Then, Another survey was conducted for verifying the criterion-related validity with the scale we developed, using the sample from 997 mothers. This study was completed from December 2018 to February 2019. UCLA Loneliness Scale and WHO-5 Well-Being Index was adopted as external criterion. Consequently, the reliability and validity of the Scale have been verified.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：子育て支援　地域　ソーシャルサポート　ソーシャルネットワーク　ソーシャルスキル　尺度開発

１．研究開始当初の背景

現代の子育てをめぐる環境の激変は、少子化によって同じ地域で子育てをする親子に出会う機会が少なくなったというだけではない。IT 化やグローバル化に伴う 24 時間稼働、成果主義や長時間労働等による働き方の多様性（平成 23 年版労働経済白書）、あるいは正規・非正規社員など経済的格差の存在、女性の社会進出に伴う共働き家庭の増加（平成 23 年版男女共同参画白書）、子どものいる夫婦の離婚件数の急増（平成 17 年版国民生活白書）など多様化した生活や価値観がそこに存在し、隣で子育てする家庭が自分と同じ生活背景とは限らない。筆者がこれまでに行ってきた研究でも、母親は子育てサロンのような出会いの機会において、夫の職業などお互いの生活背景を探りあい、交流継続の可能性を見極めている状況があった。また、子育てに伴う負担は、子どもを持つことを選択した個人が“自己責任”として引き受けるべきものとみなされる風潮も一方では強まっているという（多賀太, 2011）。現代の子育ては、このように多様化した価値観と個人主義が浸透した地域社会の中において営まれている。

平成 24 年度の児童相談所における虐待相談対応件数は、6 万 6 千件を超えて年々増加している（厚生労働省, 2014）。虐待に至るには様々な要因があるが、コミュニティから孤立した子育てもその１つである。コミュニティは、ソーシャルサポートを提供するだけでなく、監視役としての役割も果たす。例えば、子どもの成長の節目に行われる祝いの儀式は、喜びの共有と共に、虐待に対する一定の抑止力にもなっている。しかし、現代において、これらの儀式は縮小され、今や祖父母すら登場することなく、夫婦とその子どものみで完結する例も多い。かつては、子どもが産まれることによって自然に（当然のこととして）構築された、子育てコミュニティは、今や意図的に構築するものとなっている。自らが主体的に他人（ひと）とつながっていく力が必要であり、子育て支援の専門家の立場からは、母親の主体性を尊重しながら「つながる力」を引き出す支援のあり方を検討しなければならない。これからの地域保健活動においては、これまでの産後うつの早期発見（岡野, 1996）だけでなく、地域との関係性構築の観点からも支援が必要な親子を見逃さず、その具体的な支援の方向性を検討するために活用できるツールが必要である。

２．研究の目的

母親による主体的な子育てコミュニティの構築をサポートするために本研究では、研究代表者が先行研究によって定義した母親の「地域とのつながり」の概念を用いて、保健師による継続的サポートが必要な親子を発見し、さらに支援の方向性をアセスメントできる尺度を開発することを目的とする。

３．研究の方法

母親が地域との関係性を構築することを支援するための尺度は、次の 4 つのプロセスを経て開発された。

１）尺度原案の作成

「母親の地域との関係性構築支援のための尺度」で測定しようとするものは、母親の地域とのつながりの現状とその未来可能性である。具体的には、筆者が行った先行研究の成果をもとに次の 5 側面から構成した。（１）母親の地域との交流の現状、（２）つながりに対する好意的な気持ち、（３）つながりたいと思う母親の動機、（４）つながるための対人関係構築スキル、（５）子育てを通した地域づくりへの志向性。

２）市町村保健師に対する予備的調査

作成した尺度原案の妥当性を検証するために、日頃から子育て支援の第一線で活躍している市町村保健師を対象に調査を行った。この調査では、作成した尺度を構成する 46 項目に対する重要性を尋ねる内容とした。

対象となった保健師の抽出方法は、全国を 9 ブロックに分け、市町村の人口規模別に母集団と同じ割合で 148 市町村を層化系統抽出した。その後、人口 1 万人未満の自治体は 1 施設あたり 2 名の保健師に回答を依頼し、人口 1 万人以上の自治体には 3 名に協力を依頼した。回答を依頼した保健師は、計 400 人であった。

３）第１次調査

第 1 次調査は、3 歳までの子どもをもつ母親 1,182 人を対象に自記式質問紙調査を 2016 年 8～10 月に実施した。調査票の配布は、8 ヵ所の協力自治体の事情に応じて乳幼児健診または子育てサロンや保育園にて配布し、回収は返信用封筒で大学へ返送するよう依頼した。

分析は、項目分析、最尤法プロマックス回転による探索的因子分析、信頼性係数の算出、確認的因子分析によるモデル適合性の検証を行った。

4）第 2 次調査

第 2 次調査は、第 1 次調査の成果により得られた尺度モデルの適合性の再確認と外的基準との比較による基準関連妥当性や信頼性を検証することを目的に実施した。対象は、A 市に在住する 0〜3 歳までの子どもをもつ母親 997 人とした。対象の抽出は、住民基本台帳を用いた無作為抽出法を用いた。調査票の内容は、本研究の尺度および UCLA 孤独感尺度 Ver.3 日本語版、精神的健康度を測定する WHO-5 日本語版から構成した。

分析は、第 1 次調査で開発した尺度モデルに対する信頼性係数の算出、確認的因子分析を行った。基準関連妥当性の検証には、Spearman 相関分析、Man-Whitney U 検定を用いて分析した。

4．研究成果

1）尺度原案の作成

母親の地域との関係性構築支援のための尺度の原案として、（1）母親の地域との交流の現状：9 項目、（2）つながりに対する好意的な気持ち：9 項目、（3）つながりたいと思う母親の動機：6 項目、（4）つながるための対人関係構築スキル：12 項目、（5）子育てを通した地域づくりへの志向性：10 項目を作成した。

しかし、（1）母親の地域との交流の現状を問う項目群は、例えば、友人が“いる”または“いない”の 2 択で回答する形式となり、一方、他の 4 側面を測定する項目は、“とてもそう思う”から“思わない”の 4 択で回答する形式となった。また、（1）母親の地域との交流の現状が事実を確認するのに対して、他の 4 側面は母親の思いを測定する内容となった。このため、一つの尺度として 5 つの側面を同時に含めるのは、得点化における煩雑性と測定しようとする内容の質的一貫性に課題が残るため、（1）母親の地域との交流の現状は尺度原案から外すこととした。

2）市町村保健師に対する予備的調査

対象者 400 名のうち、回収数 196 件（49%）、うち有効回答 179 件（44.8%）であった。対象者の属性は、20 代 5 名（2.8%）、30 代 60 名（33.7%）、40 代 80 名（44.7%）、50 代 34 名（19.0%）であった。保健師による重要性の認識では、特に（4）つながるための対人関係構築スキルについては、“重要でない”と回答した者が 26.9%である項目もあった。これは母親個人の要因に関わりなく、その周りの環境を整えることで支援体制を構築するという保健師活動の特徴が示されたものだと考えられる。この予備的調査では、すべての項目において 6 割以上の保健師が重要であると認識したことにより、結果として尺度原案から削除される項目は無かった。しかし、自由記述において提案のあった項目については、その意見を参考に項目の表現について修正した。

3）第 1 次調査

回収は、779 件(65.9%)であった。母親の年齢は 30〜34 歳 269 人(37.1%)が最も多く、子どもの数 1 人 307 人（42.3%）、子育て経験 1 年目 91 人(12.5%)であった。個人属性の別によって分析したところ、例えば、子どもの数「1 人」と「2 人以上」の子どもをもつ母親および子育て経験「1 年目」と「2 年目以上」の母親の比較において関連があったのは、「子育てサロンなど初めてのところでも思い切って行ってみようと思える」($p<0.01$)や「子どもからちょっと離れて、一息つきたい気持ちになることがある」($p<0.01$)など、子ども数での比較では全 42 項目中 5 項目、子育て経験での比較では 6 項目のみに関連が見られた。

次に、子どもを介して地域の人とあいさつ程度の交流が「ない」と回答した者は、58 人(8.0%)だった。交流がない母親は、交流がある母親に比べて、孤独を感じる 2.45±0.98（P=.004）一方で、他者とのつながりに対して好意的な認知が低くかった。また、「ひとの悩みごとには誠実に対応したい」や「子育てをしている人に出会ったら親切にしてあげたい」など他者への貢献に関する項目の得点が有意に低かった($p<.01$)。しかし、他者と交流したいと思う動機においては、有意差は確認されなかった。

以上の基本集計結果の分析を経て、次に尺度開発に向けた分析を行った。まず、項目分析では、天井効果により 8 項目、I-T 分析により 6 項目が削除された。G-P 分析によって削除された項目はなかった。次に探索的因子分析によって 4 因子からなる尺度が作成された。4 因子の内容は、【地域の人々との交流に対する自信】、【周りの子育て環境に対する肯定的な認識】、【子どもを介した地域の人々との交流への関心】、【よその親子に対する親切な気持ち】で構成された。尺度全体のα係数は 0.870 であった。確認的因子分析では、GFI 0.95 であった。

4）第 2 次調査

回収数は 522 件で回収率は 52.8%であった。結果の祖集計の分析をしたところ、例えば「子どもを介して、地域の人とあいさつ程度の交流がある」と回答した母親は 450 件（85.7%）、「子どもを介して、地域の人と親しく会話する機会がある」297 件（56.6%）、「子育ての喜びや悩みを分かち合える親族以外の人がいる」419 件（79.8%）という状況であった。

次に、第 1 次調査で得られた尺度の因子構造における信頼性係数を算出したところ、尺度全体のα係数は 0.841 であった。確認的因子分析によるモデル適合性の検証では、GFI 0.92 と許容範囲にあることが確認された。

基準関連妥当性の検証では、UCLA 孤独感尺度との相関は-0.417（p<.01）、WHO-5 Index との相関は 0.355（p<.01）であった。

さらに、尺度得点が高い人は実際に友人との交友があったり、地域の人々との交流があるのかについて検証した。その項目は次の 3 項目であり、いずれも尺度得点が高い人は友人がいる、地域の人々と交流があるという結果であった。（1）子どもを介して地域の人とあいさつ程度の交流がある（p<.01）、（2）子どもを介して地域の人と親しく会話する機会がある（p<.01）、（3）子育ての喜びや悩みを分かち合える親族以外の人がいる（p<.01）。

以上より、本研究で開発した尺度は十分な妥当性を有していることが確認された。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

1）佐々木 龍，本田 光．子育てサロンに参加している母親の「人とつながる力」の因子構造．北海道公衆衛生学雑誌（査読有）32(2)，69-76．2019．
2）小田修輔，佐々木　龍，本田 光．子育てサロンに参加する母親の子育てを通した地域づくりへの貢献意識の実態．北海道公衆衛生学雑誌（査読有）30(2)，69-75．2017．
3）本田 光，松田宣子，平野美千代，佐伯和子．子育てを通して構築される母親のコミュニティとソーシャルサポートの意義．北海道医学雑誌（査読無）91(1)，48．2016．
4）Honda H, Matsuda N, Hirano M, Saeki K. Relationship-Building Skills of Child-Rearing Mothers in Japanese Communities. Nursing Research and Practice.（査読有）1-6, 2016. http://dx.doi.org/10.1155/2016/9091039

〔学会発表〕（計 7 件）

1）Honda H, Hirano M, Saeki K. Developing a Scale to Evaluate How Well Mothers with Infants Build Relationships with People in Their Communities. The 50th Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health Conference, Kota Kinabalu, Malaysia 2018 年 9 月．
2）本田 光、平野美千代、佐伯和子、水野芳子．地域の人々との交流がない母親の「地域とのつながり」意識の実態．第 6 回日本公衆衛生看護学会学術集会（山口県）2018 年 1 月．
3）Honda H, Hirano H, Saeki K, Mizuno Y. Relationship-building Ability of Mothers Experiencing Parenting Isolation. 7th International Collaboration for Community Health Nursing Research Conference, Johannesburg, South Africa 2017 年 9 月．
4）本田 光，佐伯和子，平野美千代，水野芳子．乳幼児をもつ母親の「地域とのつながり」と個人属性との関連．日本地域看護学会第 20 回学術集会（大分県）2017 年 8 月．
5）Sasaki R, Honda H, Hirano M, Mizuno Y. The correlation between mothers' skills in developing relationships with people and awareness of contributing to community development through child-rearing. 4th FHS International Conference, Sapporo, Japan 2017 年 7 月．
6）本田 光，水野芳子，平野美千代，佐伯和子．「子育てをしている母親の地域との関係性構築」に関する保健師の認識．第 68 回北海道公衆衛生学会（北海道）2016 年 10 月．
7）Honda H, Matsuda N, Saeki K, Hirano M. A framework for assessing the necessity of continuous follow-up of childrearing families: Use of a community-based approach by public health nurses. The 4th International Global Network of Public Health Nursing Conference: Billund, Denmark 2016 年 9 月．

〔その他〕

1）公開講座の実施

2018 年 10 月 13 日（土）テーマ：「子育ての主役はだれ？‐子育てにやさしい地域のかたち」札幌市立大学が主催する公開講座にて、本研究成果の一部を紹介した。

2）ロゴの作成

研究対象者となった母親への依頼や研究成果の公表の際に、研究の趣旨を理解しやすく、また親しみが持てるようロゴを作成した。

ロゴが示す意図は次のとおり。

・大きな手：子育てを頑張っている母親や父親と地域の人々とのあたたかな交流
・「こ」（子）という文字と笑顔：その環境ですくすくと育つ子ども

地域で
そだて